

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 82 Aug. 2014

FIELD NOTE

no. 82 Aug.

特集

つどう

連載第二回「ムジン」は今……
ふたくみめ「61会」のかたのお話

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第25回
いっしょに観察する楽しみ
鳥の群れのいろいろ

あの人の尊敬する人 第2回
菊地富美男さん—わさび園で見つけたつどい—
生きものが集まる池



『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

FIELD·NOTE

no.82 Aug.2014

04

特集

しどろり

06

連載第二回「ムジン」は今……
ふたくみめ「61会」のかたのお話

10

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第25回
いっしょに観察する楽しみ
鳥の群れのいろいろ

14

あの人への尊敬する人 第2回
菊地富美男さん―わさび園で見つけたつどい―

18

生きものが集まる池

20
特集まとめ

21 食べて気づくこと

22 フィールド暦

24 さまざまな視点のなかで

26 センサーカメラが写した動物たち

28 記憶を遺すこと

30 親しみを見つめる

―カイコと過ごして気づいたこと―

32 夜の中屋敷へ

33 自信をつくった経験

34 人と自然をつなぐ人

36 ムササビ観察日記

38 ビオトープだより 夏
no.2

40 詩を通して見えること

44 FIELD・NOTE NEWS



表紙写真
北垣憲仁=写真
初夏に実をつける
マムシグサの先端
部。そのかたちと
実の色が特徴的





しごと

私たちは日常のなかで

何気なくしていることがあります。

それは「つどう」こと。

ふと気づけば誰かがそばにいて

知らないうちにそれが当たり前になっているかもしれません。

でも、どうしてつどうなのでしょう？

ふだん気にしていないことかもしれません

きっとそこには理由があるはずです。

みんながつどう理由、探ってみました。

「ムジン」は

今……

ふたくみめ 「61会」のかたのお話

「ムジン」って知ってますか？

山梨県に続く文化のひとつです。

尽きることが無い、と書いて「無尽」。

この連載では、刻々と変化を遂げ続けている、

無尽の今を追います。

今回は、50年間続いている「61会」さんにお邪魔しました。

別符沙都樹（国文学科3年） 文・写真



5月1日、星がはっきり見えるほど晴れ渡っている。時刻は午後8時。肌寒さはさして感じない。都留市駅から南東に5分ほど歩くと、「魚藤」のお店がある。瓦屋根のお店のなかから漏れる黄色い光が黒い道路を照らし出している。入口の引き戸の左側にある、矢羽を二本交えた黒い家紋が格好いい。

無尽の場へ

この日、私は「61会（ろくいちかい）」の無尽にお邪魔させていただくために、「魚藤」を訪ねた。じつさいの無尽の場を目にするのは、これが初めての経験だ。どんな様子なのだろう、もう始まっているのだろうかと思いつつ、そつと引き戸を開ける。外から見ると、暖かな黄色い光が強くなる。まず目に入ったのは右手側のカウンター。10脚ほどの椅子が並べられている。そして、左手側にある座敷。そこに無尽の参加者のかたがたが集まっていらつしゃつた。がやがやと話し声が聞こえる。20畳の部屋に長机2つを縦に並べ、そこをぐるりと囲むように座っている。

そろりとお店に入ると、スカーフを首もと



に巻いた、上品な雰囲気の女性が座敷へ案内してくださった。無尽のメンバーであり、「魚藤」を運営しているらつしやる淡野香百合さんだ。私の姿を確認すると、すでに席へついていらつしやるかたたちが、にこにこしながらおいでおいでと席へ招いてくださり、私も一緒に席へつかせていただいた。

さつそくみなさんの無尽はどのようなかたちなのかを質問させていただいた。

「61会」は、1961年に谷村高等学校（現在の谷村工業高校と桂高校の前身）の普通科進学クラスを卒業された同級生で作った無尽だ。毎月第一木曜日に「魚藤」で無尽をおこなっている。無尽は20、21歳のときに立ち上げたそうさだ。もともと同級会で集まっていた、その流れで無尽を作った。9人のメンバーは、淡野さん以外すべて男性。メンバーは抜けたり入ったりを繰り返しながら、常に10人前後の人数で続いている。メンバーは現在71、72歳で、つまりこの「61会」は50年以上もの歴史があるということだ。半世紀……。長いとは分かってても、言われてばつと理解できるような長さではない。



無尽の流れ

「集める。集めて、その時とりたい人が（集めたお金を）とる」

「競りのところもあるかもしれないけれど、今はあんまない」

利息をつけてお金を定期的に集めるかたちから始まった無尽だが、今の無尽全体の流れとして、そのかたちは減っているようだ。それにしても、競りではない、とりたい人がとる決めかたとは、どういうものなのだろうか。そう思っているとき、ちょうどテーブルに次々と料理が運ばれてきた。それが落ちついたあとに、淡野さんがノートを手に、一人ひとりのところをまわってお金を回収した。そのお金のなかには、飲食代と旅行費の積立て、回収して一人に渡す分の無尽金が含まれているそう。「61会」は、一定額が貯まると旅行に行く、「旅行無尽」の性質ももっているのだ。一通り回収すると、今回は誰がもうかを話し合う。前回は誰がもらった、今回は何回目か、と話し合いが始まる。厳粛な雰囲気は一切なく、冗談を交えながらあれよあれよと

いう間に決まってしまった。ものの2、3分でさっと終わり、みなさんは本格的にお食事を始めた。

目的はひとつ

今の無尽について、メンバーの一人である伊藤さんがおっしゃる。「目的はひとつなんですけどね、友達との友和を深めるためつてのが一番の目的なだけだ」。無尽の様子を見ると、確かに、と納得する。無尽のみなさんは、誰かが話すからそれを聞かなければいけないという様子ではなく、近くの2、3人くらいで話したり、席を立ててほかの人たちの話に混じったりしている。堅苦しい様子は一切なく、みなさんが本当に楽しそうにしていらつしやる。

どうして立ち上げることになったのかとうかがったときの、伊藤さんの「友情と、情性と、そんな混じりだね」という答えが印象的だった。「いい仲間です。はつきり言つて」。そんなふうにも前で言えるのが羨ましい。面映おもはばささえ感じてしまいそうな言葉だが、ほかのかたも何度も口にする。みなさんの言い



①～⑥：無尽の
様子。お互い
をあた名で
呼び合うなど、
仲のよさがう
がえる
⑦、⑧：「魚藤」
の外観



かたはお世辞や社交辞令などの言いかたでは
なかった。自然と口をついて出たのだろう。
無理矢理言ったのではなく、堂々とした言い
かただ。

信用で成り立つ

「悪用されてき、最初（お金を）とつてき、
逃げちゃう人いたのよ」

「そういう常習者がいた。毎月毎月払ってい
かないでさ、2、3回払つてもう、あとはも
う（払わない）」

「そうそう、とほかのかたも頷く。銀行が発達
していなかったため、庶民の金融機関の役割
を無尽がしていた。そのときにあったお話だ。

「一番気をつけなきゃなんないのは、無尽を
始めようと言った人の信用度の問題で、始め
て、一番最初に自分がとつて、夜逃げをし
ちゃう」

無尽を立ち上げようと言いだした発起人が、
一番そのような危険があったそうだ。当時い
くつも無尽を掛けもちし、ひとつの無尽でお
金が払えないからほかの無尽でもらったお金
をまわしていき、結局払えなくなる人がいた

という。そんなことがあったのかとぎよつと
する。私なら、そんな状態ではとてもお金を
渡す気にはなれない。そもそも無尽が長続き
しないだろう。「61会」のみなさんがとにか
くおっしゃるのは、そういうことは昔にあつ
た無尽の話だということだ。

「無尽が続くということは信用があるつちゅ
こと」

今の「61会」のみなさんの様子を見ると、そ
んな物騒なことがあつたとはとても思えな
い。それほど楽しそうで、親密な繋がりが築
かれているのが、ありありと感ぜられるのだ。

信用で成り立つ。目には見えないあやふや
なものかもしれないけれど、だからいけない
とは思わない。むしろその関係に憧れよう
な感覚を抱いた。お話のあいだ繰り返しおつ
しゃつた信用や友情といった言葉。その証が
50年という年月であり、あのじつに楽しそう
な雰囲気なのだろう。今ここに長く続く「61
会」という無尽があることが、信用という一
見目に見えないものを体現しているかのよう
だった。



附属小学校に隣接する森

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

いっしょに観察する楽しみ

北垣憲仁（本誌発行人）＝文・写真

今

年も、都留市立附属小学校で4年生を対象とした授業をしています。毎年、「身近な哺乳類に出会う工夫をしよう」というテーマのもと、年間7回ほどの授業をおこないます。ふつう野生の哺乳類に出会うのは難しいため、学校の授業でも扱われる機会はほとんどありません。

附属小学校には、校舎に接して森があります。スギやヒノキの植林地ですが、ここにも哺乳類は暮らしています。じつさい、この森でニホンジカを見たという子どももいました。森が近いこともあって、日ごろから野生動物への子どもたちの関心は高かったようです。この森にすむムササビなど、身近にいる野生動物にじかに出会うことは自然に親しむきっかけになるのではないかと考え、子どもたちの関心の高い哺乳類をテーマにしたのでした。

附属小学校の森で、事前に動物の食べ痕など生活の痕跡を調べてみると、ムササビやニホンリス、アカネズミ、ヒミズなどが暮らしていることが分かりました。そこで、このような動物を対象として、みんなでその出会いを楽しめるような授業の内容にしました。

観察の工夫をいっしょに考える

この授業では、子どもたちが自分たちで観察の工夫をします。私は、基本的な生態を紹介するだけです。たとえば、ニホンリスの場合、枝を走り木から木へと移動すること。まわりが見通せるような場所で食事をするのが好き、ということなどです。

去年、私の話を聞いた子どもたちは、担任の先生や学級の人々と相談しながら、どんな工夫したらニホンリスに出会えるかを話し合いました。なるべく校舎の近くでニホンリスを観察したい、という子どもたちの思いから、みんなで校舎の窓のそばに餌台をつくり、好物のクルミを自分たちで拾い、置くことにしました。

しかし、それだけではスギやヒノキの葉が茂っているためニホンリスがどこからどのようにして来るのかよく見えません。そこで子どもたちは、森に落ちていた丸太を枝にみたくて木々を横木でつなぎ、リスが通る道をつくりました。開けた場所には餌台をかけるおきました。すると、ニホンリスが木の橋を渡って餌台に来るようになったのです。



餌台に来たニホンリス



ニホンリスを観察するための橋をつくる

定期的な観察をする

附属小学校の子どもたちのなかでそれまでに数人がニホンリスの姿を見たことがありました。けれどもそれも一瞬のことで、食事や移動のようすをじっくりと観察できたわけではないようでした。そこで子どもたちは、クルミやドングリなどを餌台に置く当番を決め、休み時間などに観察し、日記をつけることにしました。そうすることで、どの時間にニホンリスが餌台に来ることが多いかわかるようになり定期的な観察ができるようになっていきました。

学級では、今日はこんなニホンリスがいた、こんな動きをしていた、いくつクルミをもっていた、などが話題になっていきました。担任の先生によると、それは学年をこえて全校の子どもたちが興味をもつきっかけにもなったようです。もつとほかの動物にも会ってみてみたい、と関心の対象もしだいに広がっていきました。家庭でもニホンリスやムササビなど身近な野生動物のことが話題になり、家のそばにあったクリなどを餌台の食物として自発的にもつてくる子どももいました。

観察の成果を分かち合う

ある子どもは、観察日記に次のように書いていました。「いつもニホンリスを見ていますが、えさだいに来ているのは一匹ではないようです。色も動きもちがうからです」。それを聞いた子どもたちは、みんなで観察しながらその発見が正しいようだ、ということに気づきました。

私はふだん一人で観察することを基本にしています。自分のペースで動物の暮らしぶりを見てみたいと考えているからです。けれども、いつしよに観察し、その結果をもちより、また確かめ合うことで、自分の関心だけでは気づかなかった新しい発見や喜びにつながっていきます。それは、新たな関心を子どもたちのなかに呼び覚まし、観察をつづける動機にもなっているのでしょうか。

附属小学校の森は、全国のどこにでもあるような植林地です。しかし子どもたちが自由に森に出入りし、いつしよに観察しているようすを見ると、これこそ発見や楽しみを分かち合い自ら学ぶ生きた博物館であり、自然観察の魅力だと思えるのです。

第25回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

鳥の群れのいろいろ

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真

鳥の群れは、じつに多様です。彼らはなぜ、集まって生活をしているのでしょうか？数十～数百羽でねぐらをとったり、ときにはさまざまな種類の鳥が集い、行動をとともにしています。そんな鳥の群れを見てみましょう。

何羽もの鳥が集まり、行動をとともにする一団があります。秋の雑木林で出会うのは、シジュウカラやエナガ、ヤマガラやコゲラなど複数の種類の鳥が集まったもの。これを混群こんぐんといいます。異なる種類の鳥が木の幹や枝先、葉の茂みなど思いおもいの場所です。食物を探しています。この一団をしばらく観察していると、エナガを先頭にしてほかの鳥がその後ろをついて行っているように見えます。混群としてまとまり、ときに天敵の襲来を警戒し、林を移動しています。ほかには、春と秋に10～30羽前後の単位でヒヨドリが渡りをしますし、秋から春先にかけて、ハシブトガラスやハシボソガラスは数十～数百羽でねぐらに向かいます。

こうした鳥の集まりを「群れ」と呼びますが、鳥の群れはじつに多様です。複数の種類の鳥からなる混群、特定の種類だけで数十～数百羽が集まったもの、ハクチョウ類やツル類のようにおもに家族群が集合したものや、カモ類のように異種間のつながりがあまり深くない集団。彼らはなぜ、行動をとともにしているのでしょうか。

ねぐらに集まるもの

混群になるメリットとしては、やはり天敵の接近をいち早く察知することです。天敵に襲わ



①



②



③



④



⑤

- ①夕方、ねぐらに向かうカラス類
- ②電線に止まるツバメの群れ
- ③キンクロハジロとホシハジロ
- ④昼間、地上で採食をするスズメ
- ⑤タラノキの実を食べるムクドリ

右ページの写真：桂川の上空を飛ぶカワウ

れた場合も、数が多いほど自身が捕食される確率は低くなります。また、山のなかに点在しているであろう食物の多い場所も、混群で行動をしていると発見しやすくなります。

夜だけ大きな群れになる種類の鳥もいます。スズメやムクドリ、ハクセキレイやカラス類がそれです。これらの鳥は冬のあいだ、ねぐらに集まって夜を過ごすため、夕闇が迫るころ、ねぐらに三々五々集まります。ねぐらの場所は街路樹や竹やぶだったり、橋桁や電線だったり種類によって異なっています。繁殖を終えたツバメや幼鳥は、河川敷やアシ原、電線などをねぐらにします。共通しているのは、安全に夜を過ごせる場所であること。夜が明けると各々飛び立ち、昼間は単独か小群で過ごします。

群れで夜を過ごすのは、混群のときと同様に捕食者対策でしょう。また、ねぐらは情報センターの役割を担っているという考えかたもあります。たとえば、前日に食物のたくさんある場所を見つけた個体は、翌朝すぐにそこへ向かうと思われれます。あまり食物を取れなかった個体は、そうした鳥について行くことで、労せず食物にありつけます。それから、多くの個体がいると繁殖相手を見つけやすくなることも利点のひとつかもしれません。

群れのざわめき

8月になると、スズメの群れが街路樹でねぐらをとるようになります。本学では毎年、イチョウやケヤキがスズメのねぐらになっていきます。夕方、これらの木にはスズメがばらばらと集まり、最終的にその数は数百羽にのぼります。多くの個体が集まり、鳴き声を出していますから、ねぐらの下では人は会話もできないほどです。この喧騒がびたりと止むとき、スズメのねぐら入りは終わります。

スズメのねぐらには、どういう個体が集まって来ているのでしょうか。家族の集まりなのか、同じ世代の集団なのか？ これらが混在したものであるなら、その割合が気になるところです。ねぐらの下にはスズメの風切羽が多数落ちていきますので、この羽を拾い集めることで、どんな個体が集まっているのかを推定できるかもしれません。

なお、新潟県上越地方でおこなわれたハシボソガラスの春のねぐら調査によると、ほとんどが若い個体だったそうです。つまり、春のねぐらには繁殖できない(しない)個体が集まっているといえそうです。時期によって、種によって群れの構成員は変わるようです。



第2回

あの人の 尊敬する人

菊地富美男さん

—わさび園で見つけたつどい—

さまざまなかたのお話を聞いてみると、必ず現れるのがほかの人との出会い。

私の尊敬している人にもまた、

尊敬している人がいた。

私が出会ったあの人がすてきだと思う人はどんな人だろう。

第2回でお話をうかがったのは

私の尊敬するあの人—山口とも子さん—に

ご紹介いただいた「菊地さん」。

わさび園を営む菊地さんのもとには

たくさんのかたが集まっていた。

伊藤瑠依（社会学科2年） || 文・写真

自然のなかに広がるわさび畑

6月25日。東桂の細い路地地に入つて坂を下つていくと、そこはふだん見ている都留市とはまた違った光景だった。車の窓からすぐ左を見れば、湧き出した富士山の水が岩を伝つて滴り落ち、右を見れば山々がぐつと近くに感じられた。そんな光景に挟まれた道の先に、都留市で唯一のわさび畑がある。

雨が降るなか、さつそく「菊地さん」にお会いすべく、車を降りてあたりを見渡した。すると、すぐに目に入ったのは、手書きの横断幕。見れば、私の名前と歓迎の文字が書か



手書きの横断幕。横1メートルほどの大きさがある

れているではないか。思わぬ贈り物に始めは驚いたが、心遣いがうれしくて気がつくとも口元がゆるんでいた。会ったこともない私をここまで歓迎してくださるなんて、どんなかたなのだろうと期待で心がはずむ。

そんなことを思っていると、ひとりのかたが慣れた足取りで坂を下つてきた。こんにちは、と張りのある大きな声とともに、頭に巻いていたタオルをさつと取り会釈をする。褐色の肌に笑みを浮かべ、はつらつとした姿。

このかたが東桂で無農薬のわさびを作っている菊地富美男さん(46)。山口さんとは、菊地さんがほしのさと工房を訪れたことがきっかけで知り合ったという。おふたりとも無農薬の食材を大切にしており、そのことから深く交流をもつようになった。山口さんが尊敬する菊地さんとはどんなかただろうか、お話をうかがった。

3代目のわさびの作り手

菊地さんと私が向かい合わせに座るその横で、背筋を正して座っているのは山室正吾さん。いつでもまわりに気を配り、明るく声をかけてくださる山室さんは、昨年からのわ



わさび畑のようす。暑さに弱いため直射日光を避ける黒いネットが掛けられている

さび畑に手伝いに来ており、今年の4月から菊地さんとともに働いている。前職を辞めてここで働くこと決めた山室さんの一番の理由は、菊地さんの人柄だという。はにかみながら菊地さんを「冗費的な存在で」と言う山室さんと、それを聞いて「よく言うよ」と冗談っぽく返す菊地さん。おふたりのテンポのよい会話を聞いてみると、これは気心知れた仲だからこそできる会話に違いないと思い、自然と顔がほころんだ。

現在の菊地さんの代でこのわさび園は3代目にあたる。初代が富士山の湧水をなにかに利用できないかと考え、わさび作りを始めた

そうだ。じつさいに菊地さんが仕事として継いだのは28歳のころ。それまでは都会暮らしに憧れ、わさび園を継ごうなどはまったく思っていなかったという。「子どものころからこういう環境に暮らしてたんで、なかなかこれがいいって思えなかった、というか気がつかなかったんですね」と菊地さん。しかし、さまざまな人と出会い、自然を愛する人々を目の当たりにしたこと、でんだんと心にも変化が表れ、「今では自然が大好きになりました」と朗らかにおっしゃった。そう語るようすは、無邪気な少年のように見えた。

お客さんにとっていいもの

わさび作りをするうえで大変なことは何かとうかがってみると、四季によって状況が変化することだという。しかし菊地さんはすぐに、「大変というか楽しい」ともおっしゃった。その日の気温、天候、さまざまなものが複雑に絡み合っていて自然は、マニュアル通りのことをおこなったからといって必ずいいものができるわけではない。じつさい菊地さんはわさびのことはまだまだわからないうちにおっしゃる。けれど、複雑だからこそ毎

日、毎時期、小さくても何かしらの変化がある。それは大変なことでもあるけれど、わさび作りの楽しみでもあるのだ。

若いころは自然を制覇する、自分たちが管理している、という意識だったと菊地さん。けれど、10年ほども続けなければわかっていくことがあつた。それは、自然は大きくておろかやさしいものであること。そして私たちがかなうようなものではないということ。それに気がついたとき、農業を使って思うままに扱おうとするのをやめたそう。そうして無農薬栽培を始めた菊地さんだが、よかつたのは自然にとつただけではない。もちろんそれを食べる人間にとつてもいいものであつた。菊地さんは言う。

「まあ、そのころ（農業を使っていたころ）は自分にとつていいもの、お金だつたりとかつてことじゃないですか。今はやつぱり、お客さんにとつていいものを第一に」

生きいきとした表情

お話をうかがっている最中、菊地さんはある方向を指す。示されるままにその方向へ目を向けると、そこにはたくさんさんの写真が貼られたボードがあつた。菊地さんと山室さんと



写真が貼られたボード。学生から外国人のかたまでさまざまな人が写っている

ともにさまざまな人が写る写真。みなさんの表情に、私の目は釘づけになってしまう。写真について尋ねてみると、ここに写っているかたはみな菊地さんのもとに訪れたかたがただと教えてくださった。

菊地わさび園で写真を撮るときの掛け声は決まっている。それは「ハッピー、ラッキー」。最初写真を撮ったときは少し照れくさく感じたけれど、菊地さんと山室さんが満面の笑みで言っているのを聞くところからまでつられて

笑顔になつてくる。「ハッピー、ラッキー」。
菊地わさび園でこの言葉は人を笑顔にさせる
合言葉だ。そう思っているのは私だけではな
く写真に写るみなさんも同じようだ。写真を
撮るときについてしまいがちな緊張した表
情をしている人は誰ひとりとしていない。目
尻にしわを寄せ屈託のない笑みを浮かべる
人、どこか違う方向を見ながらもはにかんだ
顔を見せている人、菊地さんと山室さんはも
ちろんのこと、すべての人の表情が生きいき
としていた。来た人に喜んでもらえるように、
そうおっしゃる菊地さんの願いが写真からひ
しひしと伝わってくる。同時に、その願いは
みなさんに届いているのだとわかる。

菊地さんのもとに人がつどう

気がつけば菊地さんのもとには、たくさん
の人がつどっていた。写真に写るかたがたの
ようにわさび園を訪ねてくる人、山室さんの
ように仕事をともにしたいと名乗り出る人。
菊地さんの人柄に惹かれた人々がわさび園に
足を運んでいた。私はそのようすを見て気づ
いたことがある。

それは、思いをもって接するのは集まる側



わさびのようすを見るおふたり。左が山室さんで、右が菊地さん

だけではないということだ。思いを寄せられ
る菊地さんもまた、訪れた人に心を込めて接
していたのだ。お客さんにとつていいわさび
を、来てくださったかたに喜んでもらえるよ
うな時間を、そんな気持ちをいつももつてい
た。菊地さんのもとに人がつどうのは、決し
て一方的な親しみからではなかった。訪れる
人も菊地さんもお互いに相手への気持ちを
もって接するとき菊地わさび園に人がつどつ
ていたのだ。

これまでも私は、思いを寄せてもらえるよ
うな人に憧れ、どうすればそういう人になれ
るのだろうと考えていた。けれど考えても、
何をすればそういった人に近づけるのかわか
らなかった。そんなとき菊地さんと出会いわ
かったことがある。それは、まず私がどんな
人に対しても相手を思つて接すればよいとい
うこと。菊地さんのように、喜んでもらえる
ようにという気持ちに限らなくていい。笑つ
てもらえるようにしようでも、親切にしよう
でも、ときには相手のためを思つていれば怒
ることだっていい。慕つてもらおうと考える
前に、自分なりに心を込めて相手に接すれば
いいのだ。

生きものが集まる池

6月1日、最近まで枯れていた中屋敷の小屋の前の池に水を戻した。復活したこの池にはどんな生きものが集まるのだろうか。

南條新（初等教育学科1年）＝文・写真

7月11日の池のようす

中屋敷の池

中屋敷にある池は縦2m横1mくらいだ。周りは草原で、近くには川が流れている。この池は人工的に作ったもので、中屋敷の入り口から湧いている水を、パイプを通して引いている。湧き水は一年中温度がほとんど変わらず、池には17度くらいの温度の水が注がれている。生きものを見るのが好きな私は、どんな生きものが集まるのか気になり、6月1日にこの池を訪れてから通い続けている。

見つけた生きものたち

この池にはとくに虫が集まる。そのなかでも池の上を飛び回っているトンボが目立つ。この池で初めてトンボを観察した日は6月16日で、オオシオカラトンボを見つけた。そのオオシオカラトンボは池の土手にさしてあった枝をとめて入っていた。私が虫取り網を振り回してもどこかへ行ってしまう。とはなく、オオシオカラトンボは池の周りを回つてから枝に戻る。その日は私が見ているあいだずっと枝に止まっていた。池を観察していた私を見張っているようだった。

6月26日には、黒色と黄色のしま模様があるトンボが産卵しに来た。水面を素早くおしりであたいて産卵していた。あとで何というトンボのメスなのか調べたのだが、オニヤンマなのかオオシオカラトンボなのか区別がつかなかった。あのとき写真を撮っておけばどっちかわかったのに、と後悔してしまう。

ほかにもギンヤンマらしきトンボが池の周りを飛んでいるところを見たことがある。いつ来てもトンボが池の周りを飛んでいて、この池がトンボに人気があるように見えた。水が止まっているか流れているかなど、トンボの産卵場所の好みは種類ごとに違っている。この池に集まるトンボは水が止まっている場所が好きな種類だが、この池が復活する前はどこにいたのだろうかと思ってしまう。

7月3日は雨が降っていて、池に行ったらヤマアカガエルに出会った。ヒキガエルやアマガエルに比べてほっそりとした体つきをしている。雨の日はカエルが活発になると言われているが、この日は1匹だけしか見られなかった。ヤマアカガエルは私に気づくと池の隅っこへ跳んで行って、そこにあった石の上でじっとしたり泳いだりしていた。

【池で出会った生きものたち】



オシオカラトンボ。青色の個体はオスである。対してメスは黄色っぽいので、見つけたときは別種かと思った



ヤマアカガエル。このカエルの鳴き声はまだ聴いていない。繁殖期の2月になれば聴くことができそうだ



ヤゴ（トンボの幼虫）。ミヤマアカネの幼虫で中屋敷の入り口付近の田んぼから来たと思われる



ミズカマキリ。セリの茂みにいた。学校のプールと一緒に泳いだことがあり、懐かしさを感じる

その日は考えなかったが、少し日を置いたらヤマアカガエルが池に何をしに来たのか気になった。雨が降っていたことが関係しているのか、または池のなかに獲物がいてそれを食べにきたのか。この池でカエルを見ることは少なく、正確なことがわからなくてもやもやする。ただ、雨が降っていた7月11日に再び池を訪れると、またヤマアカガエルを見るこゝとができた。この調子で雨の日に観察しに行き、なぜヤマアカガエルが来たのかを知りたい。

池のなかにはたくさん小さな虫がいる。ゲンゴロウの仲間を捕まえようと池の土手にあるセリの茂みのあたりをバケツですくつたら、1cmくらいの虫がたくさん入っていたことがあった。なかにはカゲロウの仲間の幼虫やトンボの幼虫であるヤゴがたくさんいた。体の色は池の底のような茶色で、しかもセリの茂みに隠れていたもので、今まで気づけなかったことに納得がいく。いつもは池を上から見下ろしたり水面に顔を近づけたりして見えたものを観察していた。しかし、物陰の水をバケツですくつてみて、生きものは見えなところにもいると知った。こうやって天敵から身を守っているところを見ると、幼虫た

ちは賢いし、セリの茂みがある池を見つけて卵を産んだ親もよく考えていると感心する。

私は最初集まってくる生きものに興味があった。しかし観察を重ねるごとに、生きものが絶えず集まってくるこの池にも興味をもった。近くの川や田んぼとは違う環境がこの池にあり、それを見つけた生きものが集まる。しかも、2ヶ月のあいだだけでさまざまな生きものが集まった。この池の、生きものを引き寄せる力に驚かされた。

前から知っていた生きものや初めて見る生きものがいつも集まっている中屋敷の池。この池では生きものをじっくり見たり、手に取って観察したりすることができる。ここまで生きものとの距離を縮めることができる場所は、この池が初めてだ。だから観察するたびにわくわくしてしまう。私はまだ、この池の初夏のようすしか知らない。これからの季節ではどんな生きものが集まるのか気になってしかたない。

【参考書籍】

日本環境動物昆虫学会 生物保護とアセスメント手法研究会 『トンボの調べ方』
文教出版 2005年

つどろ

私たちはさまざまなかた、生きもののつどいを
後を付いていくようにして見てきました。

まさに、彼らの足跡をたどる、
そんな気持ちでお話をうかがったり、
観察をしたりしてきました。

そうしているうちにわかったことがあります、
それは、目に見えないものをたよりにして、
つどっているということです。

信頼によって和気藹々とした空間が下りあがったり、
お互いに思っていることがあることで、
関係が下りていたり、
生きものが自分の意志で場所に集まっていたり、
すべてのものは、目に見えない思いや考えをもって
つどっていたのです。

食べて 気づくこと



6月14日、この日は中屋敷へウメを収穫しに行く日だった。もちろん、ウメの収穫も楽しみだったが、私はそれと同じくらい中屋敷のクワの実を食べることも楽しみにしていた。なぜなら、中屋敷のクワの実はこのあたりでも特別においしいと聞いていたからだ。

今村遥香（社会学科1年）＝文・写真

うぐいすホールへ続く道を歩いているときに、友人にすすめられてクワの実を食べた。噛むとジャリつとして、草のような味が口のなかに広がった。そのクワの実はずっと甘くない。このときから、おいしいクワの実を食べてみたいと思うようになった。ちょうどウメの収穫で中屋敷へ行く機会があったので、私はそのときにクワの実も食べようと決めていた。

中屋敷につくと、道沿いにクワの木が3本並んでいた。どの木も枝が下を向くくらいたくさんの実をつけている。さっそく、一番近いところにあつたクワの実をとる。この実は一粒一粒にしっかりと身が詰まっていて、うぐいすホールの道沿いのものよりひとまわり大きい。実が柔らかく、とただけで手に紫色の汁がつく。これはおいしそうだと思いついてみると、水っぽくてスイカのような味がある。意外に甘くなく、私は予想を裏切られ少しかかりした。今度は、さらに中屋敷の奥にあるクワの木の実をとってみる。実は小ぶりでも、手にとつただけでは潰れない弾力がある。どんな味がするのだろう。そんなことを思いつつ、今度こそおいしいクワの実であ

りますようにと期待を込めて食べてみる。すると、実は甘酸っぱくて今まで食べたクワの実のなかで一番おいしかった。

異なるクワの実を食べ比べるまで、私は木によって実の味が変わることを知らなかった。また、一見大きい実のほうがよく熟しているかと思っていたのだが、食べてみると小さな実のほうが、ぎゅつと甘さが詰まっていた。これは新しい発見だった。木の生えている環境が違えば、実の味が変わることを、食べて初めて気づいた。考えたり見たりして知ること以外にも、食べて知るということもあるのだと教えてもらった。

今でもクワの実の味が私のなかに残っている。自分のからだに入れて身をもつて味を知ったことで、考えたり見たりして知るよりも親しみがもて、食べる前よりクワの実のことが好きになった。



中屋敷の奥にある、おいしい実をたくさんつけたクワの木

フィールド暦

生きものたちの活動が活発になり、にぎやかになってきたこの時季に都留で見られた生きものたちをご紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



シモツケ

2014年6月21日 うぐいすホール付近

日当りのよい乾燥したところを好む低木で、うすピンク色の小さい花をまとまって咲かせます。



ナンテン

2014年7月8日 中屋敷フィールド

庭先によく植えられ、冬ごろに真っ赤な実をつけます。その実は咳止めの薬としても使われます。



オオマツヨイグサ

2014年6月21日 うぐいすホール付近

黄色の花を咲かせます。花は夕方開いて翌朝にしぼむことが多いです。江戸時代から明治時代に渡来した植物です。



タマゴタケ

2014年7月14日 楽山公園

真っ赤なかさの部分と根元の白いつぼが特徴的です。毒はなく食べることができ汁物や鍋物に入れると美味しいそうです。



ヒヨドリ(左)

2014年6月17日 本学附属図書館前

地面に落ちたヒナ(右)に食物を与える親のヒヨドリ。近くの木にもう一羽の親鳥もいました。紫色の木の实を食べていました。

キボシカミキリムシ(右)

2014年6月15日 中屋敷フィールド

名前の通り背中には黄色の斑紋がありません。触角が長く、体長の2倍にもなります。イチジクやクワの葉を好んで食べます。





アカボシゴマダラ (春型)
2014年6月13日 本学ビオトープ
この写真は春型のために見ることができませんが、夏型では翅の下方に赤色のリング紋がつけます。



ヒオドシチョウ
2014年6月15日 中屋敷フィールド
翅の下方に青色の模様をもつ蝶です。ヒオドシの名は武士が身につけた緋威ひゑという武具ぶぐいに似ていることからきています。



オオミズアオ
2014年6月26日 地域交流研究センター前
青緑色の翅が特徴的な蛾です。大きさは8cmから12cmほどで、住宅街でも見かけることがあります。



イチモンジチョウ
2014年6月15日 中屋敷フィールド
翅の真んなかに通る白い線からイチモンジの名前がつけました。幼虫はスイカズラを食草とします。

餌台に集まってきた生きものたち

本学コミュニケーションホール横の植え込みの餌台に果物の皮、マンゴーとバナナを置いてどんな虫が集まってくるか観察しました。やってきた生きものたちをご紹介します。



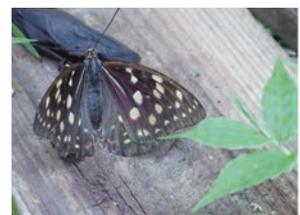
メロン皮とスイカ皮に最初にやってきたのがコガネムシでした。気がつくとも多くのコガネムシが集まっていました。

2014年7月13日



ハチとオオムラサキの食物の取り合いに遭遇しました。オオムラサキはハチの攻撃をもろともしませんでした。

2014年7月24日



バナナにやってきたオオムラサキです。ほかの虫が来ると翅を広げほかの虫に場所を取られないようにしていました。

2014年7月25日

さまざまな

視点のなかで

6月14日、フィールド・ミュージアムが主催する自然観察会にスタッフとして参加した。自然観察会は年4回おこなわれ、自然のなかを歩きながら本学学生がスタッフとなり案内をする。今回は「新緑の森を歩こう（自然観察入門編）—自然に親しみ、生きものたちの気配を感じてみよう—」をテーマにうら山をおもに歩いた。

廣瀬はづ紀（社会学科3年）＝文・写真



ドドメって……

うら山に向かう途中、先頭を歩いていたスタッフがクワの木の前で立ち止まった。そこには黒く熟した実がたくさんなっている。我先にと子どもたちはクワの実に手を伸ばす。年配のかたがたも最初は子どもたちと一緒になつてクワの実を食べていたが、その後はうしろのほうで昔はよく食べていたなと、一緒に来た仲間内で懐かしそうに話していた。するとある男性が、クワの実のことかわかりませんがドドメって言いますよね、とおっしゃった。ドドメってどういう意味なのだろう。どんな字をあてて書くのだろう。初めてその言葉を聞いた私の頭の中は疑問が巡り、興味が尽きない。スタッフの一人がどなたか知っている人はいませんか？と呼びかける。熟したクワの実のような色、クワの実の染色で出た色をドドメ色と呼ぶことを知っている人はいたが、詳しく知っている人はその場にはいないようだった。一部の地域で使

われる方言なのではないかということでその場は収まり、再びうら山へと足を進めた。

自然観察会が終わってから「ドドメ」という言葉が気になり、調べてみた。しかし、有力な情報はえられなかった。

それぞれの見えかた

自然観察会は、スタッフがコース内で説明するものを決めてプログラムを組み立てる。

うら山に入つて、みんなでマムシグサの前に立ち止まる。そこでマムシグサは時期によつて雌雄が変化するという説明をスタッフがした。すると、何故変化するのかと問いかけてきた男性がいた。雌雄変化する理由により多くの子孫を残すため。まずオスのときに花粉を飛ばす。その後メスになり自分自身も種子を作り、より子孫を残すそう。私は雌雄変化することは知っていたが何故変わるのか考えるわけでもなく、そんな植物があるということに驚いていただけだった。よく考えてみると、そういう疑問をもつことにも納得だ。



左：マムシグサの花
右：マムシグサの実。オスからメスに変化し、実をつける
上：クワの実。昔は、熟したクワの実を使って染色をおこなっていたこともあるそうだ



ほかに、小さな花をつける野草に詳しく、うら山を歩いている途中で野草を見つけるとその名前を覚えてくださる女性、山菜に興味をもつ女性。観察会に参加した大人たちは自分の興味のあるものを見つけて共有したり、突き詰めていったりすることを楽しんでいるようだった。

子どもたちは大人たちと同様に自分が見つけたものを共有したいという思いもあるものの、大人たちとは少し違うようだ。うら山は子どもたちが知らないものばかりで、目新しいものを見つけようときまぎまなとところに目を向ける。

虫を見つけたと私のもとに来た男の子に連れられて行った場所は、みんなが歩いているコースから少し離れたところ。そこには植物の葉の上に小さな虫がいた。私はなんの昆虫か分からなかったが、ほかのスタッフに尋ねてみると、それはカミキリムシの仲間だった。プログラムで紹介されたもの以外にも興味を示し、いろいろなものを見つけないかという子どもならではの発見だろう。

* * *

私はうら山などを歩くとき、先生から説明を受けたものに驚いたり感動したりしても、ほかのものを気にする余裕はなかった。だから、自然観察会もプログラム通り、自分たちが説明するものなかでみんなが楽しむのだと思いついていたのかもしれない。けどうら山にあるものすべてが説明されるわけではなく、知らないものもたくさんある。植物について少し詳しくなっても、自然のなかには昆虫や動物もいる。誰かが興味をもって、それについて知っている人から私も教えてもらおう。ドドメという言葉や、昆虫、野草などは私が一人でうら山を歩いても知りえなかったことだろう。

自然観察会は、ほかの人の自然の見かたを知ることができ、知らなかった自然について学ぶことができる。そこから自分が興味をもったものを調べ、積み重ねていく。それは、違う視点があるからこそ気づけた自然観察会の醍醐味だ。

センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、都留市内にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。ここでは5～6月に本学周辺で撮影された動物を紹介します。

右ページの写真は学内に設置したセンサーカメラ（右地図上★印）に写った動物たちです。また、左ページはうぐいすホール奥付近のうら山で撮影された写真です。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



ネコ 美術棟裏 6月27日
うら山の東側の尾根にも進出しており、本学周辺ではよく見かけます。ノネズミ類を捕食していることが分かっており、野生動物への影響が危惧されます。



アナグマ 美術棟裏 6月27日
センサーカメラが気になったのでしょうか。覆い被さるように写っています。至近距離でおなか側から見る事ができる珍しい1枚です。



タヌキ 美術棟裏 6月28日
タヌキは溜め糞場をつくることで知られ、うら山でもいくつか観察できます。糞をよくみるとビニール片などが含まれており、そこから里へ降りていることが分かります。



アカネズミ 自然科学棟前 6月28日
うら山を歩いても出会うことが難しい動物です。彼らに出会うためには、食痕などを見つけ、そこでじっと待つ必要があります。



ニホンジカ うら山 6月7日
 ここ10年ほどで個体数を急増させています。昨今、姿を見かけるようになったニホンカモシカとの棲み分けをするといわれ、今後さらに注視が必要です。



イノシシ うら山 5月28日
 日本では5～6月にかけて、活発に活動しているようで生活痕が多く観察されます。うら山では昭和40～45年ころより観察されるようになりました。



オオコノハズク うら山 6月10日
 水場に設置したカメラで撮影されました。本種は樹洞じゅどう(※)で繁殖をします。うら山にはほかにもムササビなど樹洞を利用する動物が多く生息しています。



ノウサギ うら山 6月8日
 ここ2年ほどで、よく姿を見かけるようになりました。うら山にまだ畑があった昭和20年ころにも頻繁に姿が目撃されたといえます。



アナグマ うら山 6月18日
 うら山でも痕跡が多く見られ、アナグマのものと思われる巣穴も見つかりました。イノシシと同じく5～6月にかけて活発に活動をしている印象を受けます。



イノシシの幼獣 うら山 6月17日
 イノシシの子育て期を知ることができる1枚です。大きさはもちろんですが、背中の縞模様が特徴です。生後どれくらいに生え変わるのでしょうか。

記憶を遺すこと

この写真、なんだろう。
そんな疑問からみえてきたのは、本や写真だけでは
わからなかった、都留の祭りの歴史。

金原由佳（社会学科2年）=文



©ミュージアム都留

5 月にミュージアム都留で開かれた企画展「写真が伝える都留の思い出―

未来へ贈る地域の記憶―」に行ったとき、1枚の写真が目にとまった。そこには、花飾りのついた大きなスピーカーをのせた車を背景に、カッパの衣装をした人々が写っていた。おそらく紙製の、手作りの衣装でポーズをとっている。なにかの祭りの写真だろうか、と写真に添えられた解説を読んでみる。そこには、市民のかたから寄せられた記憶として、昭和20年代から40年代始めまで八朔祭のさいわ若連わかれんによっておこなわれた仮装行列のものだと書かれていた。現在の八朔祭にこの写真のような仮装行列はないし、若連という言葉も聞いたことがない。若連とはなんだろう、どうしてカッパの衣装をしたのだろう。気になった私は、仮装行列について調べてみることにした。

仮装行列を尋ねて

仮装行列について調べ始めてわかったのは、若連が各町内ごとに組織された若者の集まりで、その地域における祭事・警備・消防の仕事を担当して請け負っていたということだった。また、若連は「若者連わかものれん」を短くし

たもので、もとは「若衆組わかしゅぐみ」とも呼ばれていたらしい。都留市の古い写真を集めた『思い出のアルバム都留』のなかに、いくつか仮装行列の写真があった。けれど写真が撮られたのは昭和22年や28年と古く、谷村町周辺のかたに尋ねてみても、そうした催しがあったことを覚えていた人は少なかった。

6月29日、ミュージアム都留の学芸員のかたに若連について詳しいかたがいらつしやらないか尋ねると、佐藤滋さとうしげさん（84）というかたを紹介してくださいました。

同日、佐藤さんに若連についてお聞きする。すると、『思い出のアルバム都留』に佐藤さんが提供された写真があった。「ここにいるね」と、写真の青年を指差す。佐藤さんはじつさいに若連として仮装行列に参加していたのだ。

もともと、八朔祭は生出神社おいでの祭りだった。そのなかで、神社に関係のある各町が、お神輿みこしの巡業だけでは寂しいからと、趣向を凝らした仮装行列を作り町内を巡ったのが始まりだそう。若連はそれぞれの町の一字をとり、新町しんまちなら新若しんわか、早馬町はやまなら早若はやわかと呼ばれていたという。

祭りではお神輿を担ぐほか、小中学生や女

性は、お揃いの衣装を着て踊りながら町内をめぐった。そして道中お賽銭をもらいながら進み、所々にある会所や「うちの前で踊ってくれ」という人の家の前で踊りを披露したそう。当時の様子を語る佐藤さんは楽しそうに笑った。写真にのみ残る仮装行列の姿が、鮮明に浮かぶようだった。

佐藤さんにカップの仮装行列の写真をお見せすると、スピーカーの上の看板に書かれている田若の文字から、田町（現在のつる一丁目）にあつた若連だろうとおっしゃった。ただ、田町は生出神社にゆかりはないという。



『思い出のアルバム都留』より、早馬町の若連。昭和22年ごろ撮影。前から2列目、右から5番目のかたが佐藤さん

ほかの町内がやっているのを見て田町でも始めたのでは、と佐藤さんはおっしゃった。そして、なぜカップの仮装をしたのかはわからないそう。行列はそれぞれの町内だけをめぐするため、ほかの町内の行列をみる機会はあまりなかったそう。私は、カップの仮装したのは、都留に残るカップの民話から着想を得たのではないかと考えていた。都留にはたぐさんの川があるため、カップの登場する民話がいくつかあり、長安寺前にもカップの石像がある。そのことをお話しすると、佐藤さんは「そうかもしれないね」と興味深そうに聞いてくださった。

記憶から知ること

現在の八朔祭について、早馬町屋台保存会の花田敬一さん（71）にお話をうかがった。

現在の八朔祭には若連と呼ばれるようなグループはない。けれど町の子どもたちや女性たちがお囃子や踊りを披露したり、若者に飾り屋台を引っ張ってもらったりしている。仮装行列もなくなってしまうが、八朔祭のイベント「ふるさと時代祭」のなかでは大名行列がおこなわれている。「だいぶ昔とは祭りの形態が変わってるんですがね」と花田さん

はおっしゃった。また、花田さんはお宅に飾ってある八朔祭の写真を見せてくださった。そこには、毎年の大名行列やお囃子に参加する息子さんやお孫さんが写っていた。その表情はどれも楽しそうな笑顔。家族みんなが八朔祭を楽しんでいることが伝わってくる。

今回、取材をさせていただくなかで、佐藤さんが「若者連だった人もね、遠くへ行ったり、死んじゃったりで、もうほとんどいないよね」とおっしゃっていた。もしかしたら、十年、二十年後には文献や写真に残ったもの以上のことを知ることができなくなっているかもしれない。そう思うと、私は記憶がなくなるというのを初めて怖いと感じた。

記憶は、その人の目でみたもの、聞いたもの、感じたことも含めて語られる。それが記録になるということは、歴史は誰かの人生の一部をわけてもらうことでできているということなのではないだろうか。記憶を記録するということが、それは、誰かの人生を遺すことなのだと感じた。花田さんのお宅でみせていただいた、今の八朔祭の写真。あの写真も、いつか仮装行列の写真のように、当時を思う貴重な記録になっていくのだろうか。

カイクと過ごす

6月10日、思いがけなくカイク10匹をもらった。カイクたちはすでにサナギになる前の最後の脱皮を終えたあとだった。体長は5cmほどでくもりのない白いからだ、胸部に入っている黒い仮面のような模様が特徴的だ。そつと手に乗せると、ひんやりとしていて気持ちがいい。けれど、ずつと手に乗せていると体温の低いカイクは人の体温で火傷をしてしまう。触りすぎることは禁物だ。

カイクはクワの葉を食べる。葉のなかでもとくに新芽が好きらしく、みんな新芽を好んで食べていた。成長した葉は硬くて美味しくないのだろうか。新芽がなくなると、しぶしぶというように成長した葉を食べていた。カイクにもこだわりがあるらしい。

そつと耳を澄ますと、カリカリ、ソリソリ、とカイクが葉を食べる音が聞こえてくる。自分の頭が動く範囲で上から下へとぎれいに葉を食べ進めていく姿は、ずつと覗いていても飽きることはない。ふと、ほかのカイクを観れば、寝ているのか斜め上を向いてびたつとたたまっていた。よくよく覗いているとカイクは

親しみをみつける

—カイクと過ごして気づいたこと—

カイクを飼い始めた。それは都留の養蚕の歴史を知りたいと思う大きなきっかけとなった。



カイクたちはとてもよくクワの葉を食べるため、足りなくなり夜中に葉を採りに出ることもしばしばあった

世代によって変わる

葉を求めて動くときなど、食事をするとき以外は動かない。そのためだろうか、むくむくと成長していく。しかし不思議なことに毎日覗いているはずなのに少しずつ大きくなっている実感はなく、いつの間にか急に大きくなっていた。

かつて都留市では養蚕が盛んだったため、カイクを飼育していた家庭は多い。だからわたしは上手な飼いかたを聞こうとさまざまな人にカイクのことを話した。そこで知ったのは年代によってカイクに対する親しみは違っ

ていたということ。わたしからみて、祖父母の世代のかたからは、養蚕をしていたという自身の経験を交えた親しみの声が返ってくる。しかし親の世代になると、親はやつていただけ自分たちはやつていなかったという声が多く聞かれた。子どもの世代ともなると、じつさいにカイコを見たことさえないとほとんどが言っていた。さらに「カイコ触れる?」とわたしが聞いたとき、触れると答えた子どもはいなかった。

どうして養蚕は都留から消えたのか、より詳しくカイコについて知りたいと思つたわたしは小形山にある尾県郷土資料館を訪れたさいにその理由をうかがつた。

消えた背景と当時のようす

現在は都留で養蚕はおこなわれていない。いったいいつごろから、どうしてやらなくなったのかうかがうと、昭和40年ごろを境に衰退していったという話を話してくださいました。そのころになると外国の経済拡張の影響で中国などからベンベルグ(※)など安価な繊維の布が輸入されてきて、日本の養蚕は利益が出なくなつてきてしまつたそう。それ

以降、養蚕以外の仕事につく人々も増え、しだいにカイコを飼う家庭は減つていった。小形山周辺では、平成5年ごろを最後に養蚕をする家庭はなくなったという。

かつて養蚕が盛んだった時代はたくさんのカイコを飼育していたため、多くの家庭が家の二階を使い、養蚕をおこなっていたという。理由は二階のほうが風通しがよく湿気などが少ないからだ。カイコは高温多湿に弱いいため、家で一番環境のいい部屋を使っていたという。あまりにもたくさんのカイコを飼っていたものだから、世話をしているときいつの間にか体に何匹かたかっている、なんてこともふつうにあつたそう。尾県郷土資料館のかたはそんなカイコが可愛かつたとおっしゃっていた。もちろんお金をえるために養蚕をしていたからという理由もあるけれど、当時はそれほど親しみが深い生きものだったのだ。

親しみが違う訳

今の60歳以上のかたはじつさいに養蚕に携わつていたためカイコに対して親しみをもつたが多かつた。しかしそれ以降現代に近づくとつれ、親しみをもちかたは少なくなつて

いった。

個人の好き嫌いを別にして、昔は養蚕をしていたことなどにより日常生活に溶け込んでいた生きものがそばにいた。だから生きものと人の距離が近かつた。けれど今はその生活がなくなつてしまい、生きものと関わる機会が大きく減つてしまつたように思う。子どもたちの言葉からも生きものに対する親しみが薄れていることが分かつた。

時代が進むにつれ、今まであつた関係が必要なくなり壊れていく。それを知つたら、今ある生きものとの関係を見つめ直さなければいけないと感した。

カイコはわたしにとって昔と今の生きものとの距離を考えさせてくれるきっかけとなつた。

(※) 細いしなやかな繊維からつくられた
人造絹糸の布地

【参考書籍】

安田守 『イモムシハンドブック』
文一総合出版 2010年

加藤萌香 (初等教育学科2年) 〓 文・写真



小屋のなかでメモ帳を片手に外を眺めながら生きものを待つ

夜の中屋敷へ

小俣溪和 (社会学科1年) = 文・写真

観察メモ

- 18:30 中屋敷到着
- 18:32 スズメ 2羽が小屋の前から飛び立っていった
- 18:45 カエルが鳴き始める (15分ぐらいの間隔で鳴き続ける)
- 20:22 ホタルが光る
- 20:52 ホタルが小屋へ
- 0:43 ジャボンという音
- 5:49 カモ 2羽が池に降りてきた

待ってみる

6月25日の夕暮れどき、私は中屋敷へ向かった。夜の中屋敷はどのような姿なのだろうか。昼間に行ってみると、ニホンジカの足跡や、何かが地面を掘った跡が残っていることがある。このような痕跡はいつ付けられたのだろうか。私はふだん生きものを「見つけに行く」ことが多いが、今回は生きものが来るのを中屋敷にある小屋のなかで「待つて」み

ることにした。何かがやってきて、出会うことができるのだろうか。

感覚を頼りに

小屋に着いて少し落ち着いたところからカエルが鳴き始めた。19時半を過ぎたあたりから薄暗くなり、少し肌寒くなってきた。暗さが増してくるとともに、カエルの鳴く間隔が短くなってきたような気がする。

カエルの声を聞きながら池のほうを眺めていると、奥のほうで何かが光ったような気がした。何かと思つてそのあたりに注目してみるとまた光る。緑色の光が小屋のほうに寄ってきて網戸に止まった。光の正体はホタルだった。小さな姿だけれども私が待っているときに生きもののほうからやってきてくれた。私はそのことが嬉しかった。

そんなことをしているうちにいつのまにか0時を過ぎている。そのとき突然奥のほうからジャボンという

大きな音がした。続けて小屋の隣のほうからガタツという音がしたのでライトを向けてみたが、正体はわからなかった。それから先は朝にカモが2羽、池に降りて水浴びをしていたのを見て、中屋敷の観察を終えた。

ふだんは生きものを見つけようと、生きものの姿を追い求めることばかりに夢中になり、周りのようすを観察するのを忘れてしまう。けれど夜に待っていると周りのようすを感じ取ることが集中することができて、自分が外の世界と一体になっているような気がした。今まで生きものを追いかけていたときは一部しか見ていなかったが、待つことで感じ取れることが広がっていた。留まつて観察することで周囲に気を配ることができ、自分の認識できる世界が広がっていたのだ。夜の中屋敷は、待つという新しい観察の仕方を私に教えてくれた。

自分を誇る

谷村町で見つけた平屋のお店。そこは歴史を感じさせるような雰囲気がある。興味がわいて入った先で、あのお話を聞くことができた。



寿美屋本舗のなかにある応接間のような休憩所。武さんたちはよくここでお茶を飲んでいる

偶然見つけたお店で

国道139号線を大月方面に歩いていくと、谷村町にあるミュージアム都留の近くに一軒のお店がある。横に長い平屋の建物。それは寿美屋本舗という名前のお店だ。古いチラシが窓一面に貼ってあったり、不思議なキーホルダーが飾ってあったりする。私は、その建物の独特の雰囲気に興味をわいて、お店を訪ねることにした。

なかに入ると、壁一面にお皿や湯飲みが並べられていた。店内では店主の市川武さんと弟の和男さんが談笑している。挨拶をするとうすぐ「話そう」と言ってくれました。若い人はなかなか来ないらしく、珍しいそうだ。私はお店のお話をうかがい、またそこで武さんご自身のお話も聞かせていただいた。

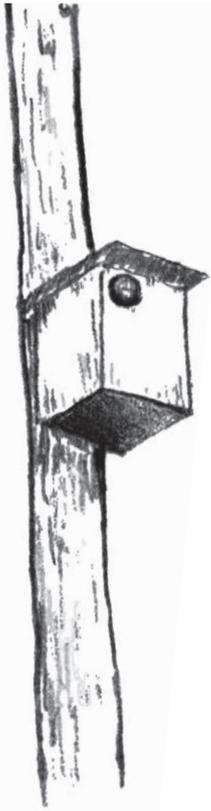
武さんに残った経験

武さんの青年時代は第二次世界大戦中だったという。はじめは軍需工場働き、のちに戦地に赴いたそうだ。それはどちらも武さんの意思ではなかったが、戦争が終わるまで続けたという。当時を知らない私には想像に限りがあっても、多くの苦難があっただろう。しかしその分だけ、今、お店をやっていることは幸せに感じられるのではないか。そう思い、今の生活についても質問してみた。すると武さんは「店も楽しくねえだよ」とおっしゃった。自分が長男だったから親が跡継ぎに決めた、という理由で今の仕事をしているという。しかし、そう言いながらも、武さんはどこか誇らしげにお店について紹介し、自分の経験についても、ほかの人が経験しな

い、さまざまなことをやってきたと語ってくださった。武さんにとってはやらされたことでも、兵役をやりきったり、お店を続けたりしたことがきつと大きな自信になったのだろう。しゃべりかたからもその自信は伝わってきた。堂々とした淀みのないしゃべりかただった。そんなふうに自慢げに話すようすが羨ましい。武さんからつたわる自信が私にはないものだったからだろう。

自信をもっている武さんが羨ましいのはなぜか、考えていて気づいたことがある。武さんは堂々と自分について語っていた。自分の経験、自分の歩んできた人生を恥ずかしながら、自分自身を誇りに感じていたのだ。武さんの自信は自分を認めることだった。私はそのようすを羨ましいと感じていたのである。自信をもつというのはつまり自分を認められることだ。この発見は今までなんとなく感覚でとらえてはいたけれど、言葉では理解できていなかったものだ。武さんのお話は、曖昧にしか分かっていなかった自信をもつということ、私に考えさせてくれるきっかけになっていた。

高橋未瑠来（社会学科1年） 文・写真



人と自然をつなぐ人

森のなかはどんなにおいがするのだろう。
ホタルはどんなふうに光るのだろう。
それはじっさいに自分で体験しにいかねば分らない。

さあ、一步踏み出してみよう。
そう手を差しのべてくれている人に出会った。



長尾泉（初等教育学科1年）＝文・写真
大釜一俊（初等教育学科1年）＝写真

頭上でホタルがふわふわと舞った。
暗いなかでじつと目を凝らして待って
いた子どもたちから、わーっと歓声が
起こる。6月27日、28日に小形山おがたやまで
こなわれたホタルの観察会には、子ど
もとその保護者、合わせて100人を
超える参加があった。

さらさらと目を輝かせる子どもたち
のそばで、同じように嬉しそうに笑っ
ている人がいる。この観察会の主催者の一人
である小口尚良おぐちひさよしさん（50）だ。小口さんはど
うしてこのような観察会をやっているのだろ
う。その笑顔のわけはなんなのだろうか。

教室のなかでは見られないもの

7月4日、私は小口さんにお話をうかがっ
た。小口さんは、都留市内の小学校で教師を
する傍ら、子どもたちを対象とした自然観察
会をおこなっている。

まずは、観察会を始めたきっかけについて
お聞きした。小口さんが本学の学生だったこ
ろ、生きものたちとの出会いの場をつくろう
というフィールド・ミュージアムの考えが日



本でも言われ始めていた。それを都留でも
やっていこうと活動していた団体があった。
それは大学のなかの動物ゼミを中心とした
「ムササビと森を守る会」という市民団体だ。
小口さんはその一員として、ムササビについ
て学ぶ「ムササビ教室」や、森のなかでドン
ダリをひろって歩く「どんぐりツアー」など
に参加していた。教師になって1年目、小口
さんは考えた。子どもたちに生きものを見せ
るときに、どうしても学校の授業のなかでは
限界がある。教室を出て、生きているありの
ままの姿を見せてあげたい。そこで自然観察
会を始めることにしたのだ。ムササビと森を
守る会はもうなくなってしまうが、そ
の活動の一部を受け継いだムリネモ協議会と

いう市民団体が発足していた。小口さんはそのなかの一つの部門としてうら山観察会をつくり、自然観察会をおこなってきた。

観察会に対する思い

小口さんには、観察会をおこなうときに決めているルールがある。一つが、安全管理の徹底だ。なにか事故でも起こってしまったら、それまでの観察会としての活動がだいなしになってしまうかもしれない。そんなことにならないために、森のなかに入るさいの事前の学習にも力を入れ、やつてはいけないことな



ホタルの観察会。出発する前に子どもたちの前で森に住む生きものたちの話をする

どの注意を怠らないようにしている。

そしてもう一つが、自然との適度な距離を保つことだ。木の実をひろったり花を摘んだりするような経験はたくさんさせてあげたい。けれど、なかには希少なものもある。その場所の環境のバランスを崩すことがないよう注意しているのだ。難しいところなんだよね、と穏やかな表情ながらも真剣な口調で話してくださった。

観察会をしていてやりがいを感じるのとはどんなときかお聞きしてみる。一番は、やはり子どもたちの素直な反応だと言う。喜んでくれたり、くり返し観察会に来てくれたりするのが本当に嬉しいですねと心から嬉しそうにおっしゃっていた。

じっさいに出会うこと

小口さんには目標がある。もつと準備をしつつかりして、もつとよい内容の観察会をすることだ。「そうすればもつと都留のうら山の面白さっていうものを伝えることができる」「いい観察会をすれば自然に参加者は増えるはずだから。都留のまちは身近に自然がた

くさんあり、観察会をするにはよい場所だし、これまでの蓄積を活かしてやっていけたらいいかな」。笑って、そう話してくださった。

学生時代や観察会の話をしているとき、小口さんは目尻にしわを寄せてにこにこ少年のように笑っていた。小口さん自身が、子どもたちとの観察会を心から楽しんでいる証拠だと思う。じっさいに出会うこと。自分の目で見る。その驚きや感動を子どもたちに伝えたい。その思いをもち続けて今まで観察会を続けてきた小口さんは、とても生きいきとして見える。かつこいい。素直にそう思うのは、私が将来していきたいと考えていることと、小口さんのなさっている活動に重なっている部分があるからかもしれない。

ホタルの観察会での小口さんの笑顔をもう一度思い浮かべてみる。参加した子どもたちの嬉々とした表情には楽しくてしかたがないという気持ちがそのまま表れているようだ。小口さんが伝えたかったうら山の面白さをしっかりと感じ取っている。小口さんの笑顔はそう実感しているからこそそのものなのだと思った。

ムササビ 観察日記

5月27日 お母さん留守



朝からいつもとようすが違いました。親ムササビ1頭だけかと思ったら、子どものムササビ2頭が寄り添っていました。今まで、親ムササビが日中に子どもたちを置いて留守にすることは一度もありませんでした。昨晚、何かあったのでしょうか。

昨年、ムササビライブカメラを2つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

5月28日 いない

昨日までは子どものムササビが2頭いた巣箱に何もいません。昨晚、2頭とも外出したまま戻って来なかったようです。

7月3日 満員御礼



今日は、ムササビライブカメラを設置した巣箱2つにそれぞれムササビが寝ていました。ここで、生まれ育った子どもたちでしょうか。本学周辺は自然に囲まれています。ムササビの森にはいったい何頭のムササビがいるのでしょうか。

6月16日 帰ってきました



ムササビが帰ってきました。しかし1頭だけのようです。子どものムササビでしょうか。小さく見えます。ここで生まれ育ったムササビなのかは分かりません。また、観察が楽しくなりそうです。

7月11日 暑い



非常に大きい台風が一番山梨に近づいたのは7月11日未明。日中は甲府市で36.3度、河口湖で31.8度など今季最高の暑さとなりました。都留でも気温が上がり、ムササビの巣箱も暑かったようです。大の字になって寝ている姿が何度も見られました。



7月7日 七夕

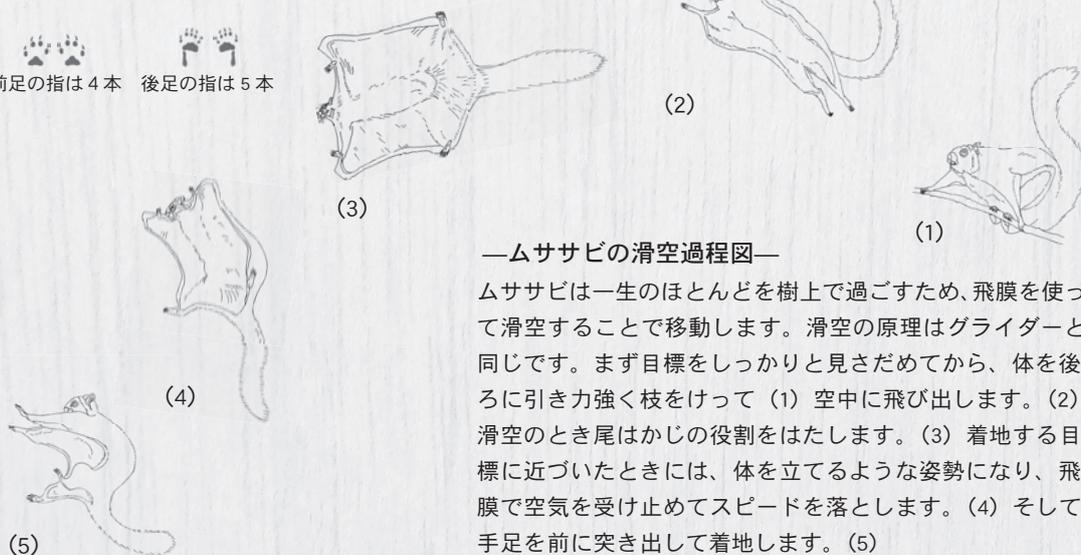


今日は、巣箱①にはムササビがいません。巣箱②に2頭いました！ブログの読者さんからのコメントで気がつきました。今まで、子育て以外で巣箱に複数入ることはありませんでした。この2頭は「つがい」でしょうか。



△ムササビコラム

 前足の指は4本  後足の指は5本



—ムササビの滑空過程図—

ムササビは一生のほとんどを樹上で過ごすため、飛膜を使って滑空することで移動します。滑空の原理はグライダーと同じです。まず目標をしっかりと見さだめてから、体を後ろに引き力強く枝をけて(1)空中に飛び出します。(2)滑空のとき尾はかじの役割をはたします。(3)着地する目標に近づいたときには、体を立てるような姿勢になり、飛膜で空気を受け止めてスピードを落とします。(4)そして手足を前に突き出して着地します。(5)

視

ビオトープ だより

no.02

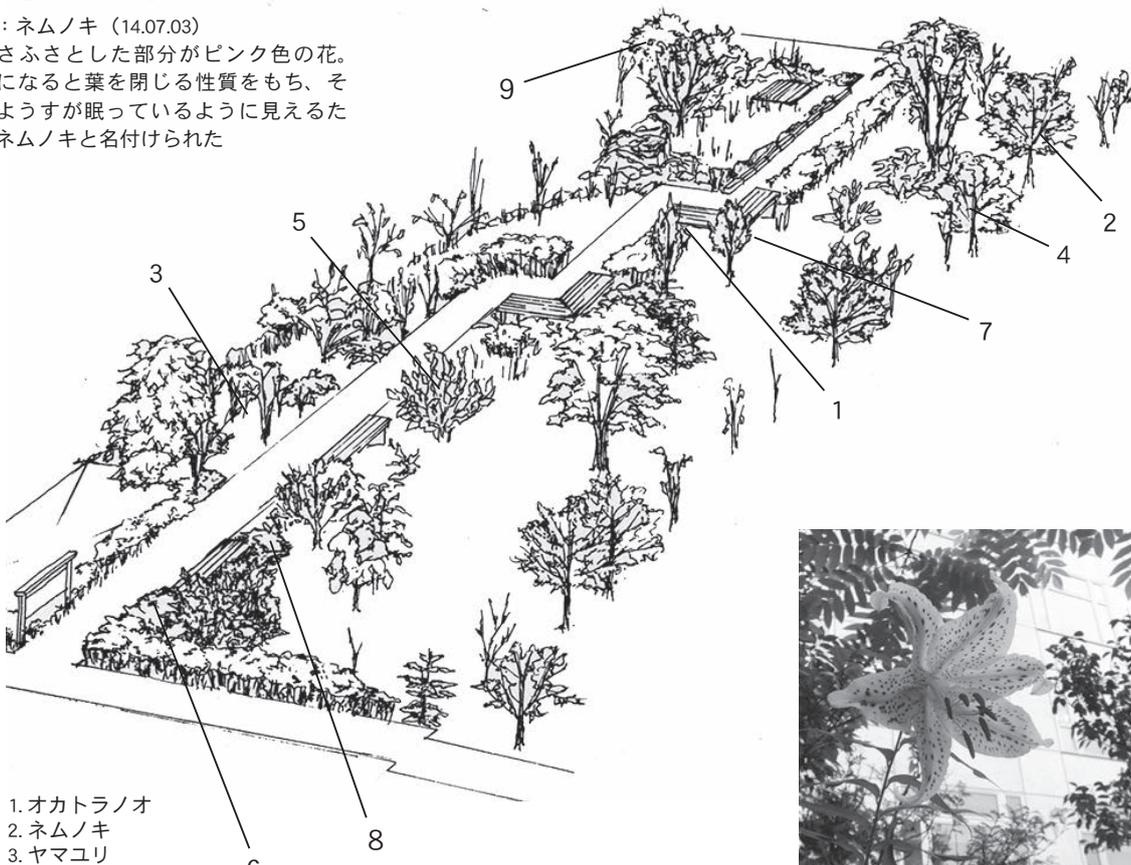


右：オカトラノオ（14.06.12）
 虎の尾のように見えることから名付けられた。小さな白い花が垂れ下がってたくさんついている

左：ネムノキ（14.07.03）
 ふさふさとした部分がピンク色の花。夜になると葉を閉じる性質をもち、そのようすが眠っているように見えるためネムノキと名付けられた

四季折々のさまざまな動植物を身近に親しめるのが本学附属図書館横ビオトープです。けれど、けっして見るだけが動植物の楽しみかたではありません。夏号では五感を使ったビオトープの楽しみかたを紹介します。

伊藤瑠依（社会学科2年）＝文・写真



1. オカトラノオ
2. ネムノキ
3. ヤマユリ
4. オニグルミ
5. アンズ
6. ヤマノイモ
7. ツユクサ
8. ハナイカダ
9. ヤマボウシ

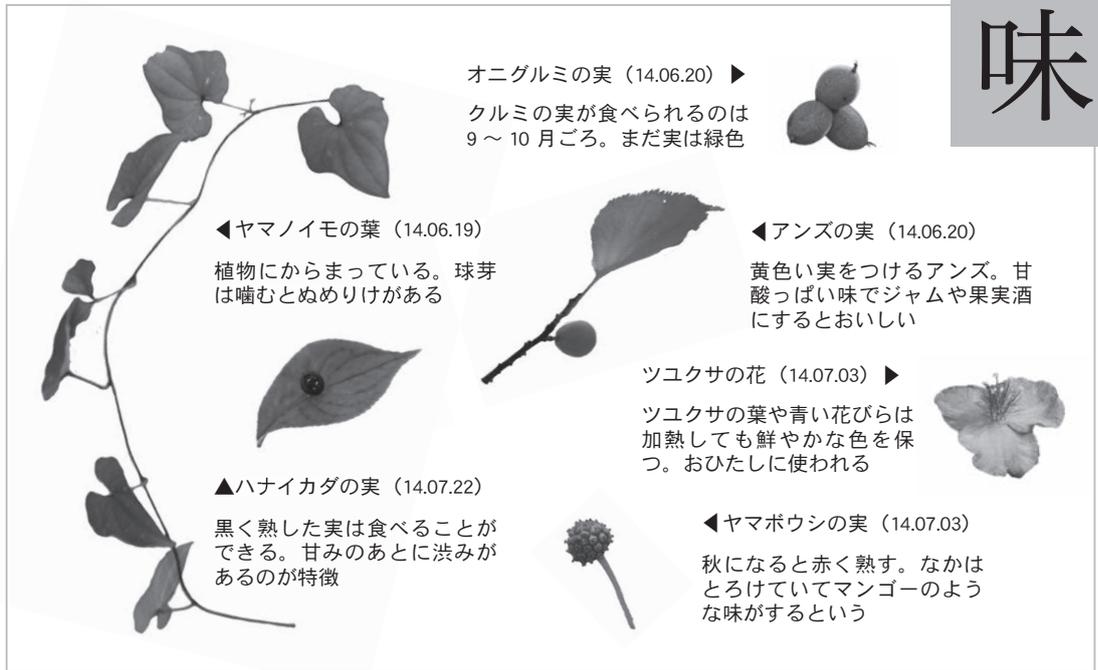


ヤマユリ（14.07.19）

赤い斑点の模様がついた白い花びらの中央に黄色い筋がある、鮮やかで美しい花。近くを通るだけで強い香りが漂う

香

味



オニグルミの実 (14.06.20) ▶
クルミの実が食べられるのは
9～10月ごろ。まだ実は緑色

◀ ヤマノイモの葉 (14.06.19)
植物にかからまっている。球芽
は噛むとぬめりけがある

◀ アンズの実 (14.06.20)
黄色い実をつけるアンズ。甘
酸っぱい味でジャムや果実酒
にするとおいしい

ツククサの花 (14.07.03) ▶
ツククサの葉や青い花びらは
加熱しても鮮やかな色を保
つ。おひたしに使われる

▲ ハナイカダの実 (14.07.22)
黒く熟した実は食べることが
できる。甘みのあとに渋みか
があるのが特徴

◀ ヤマボウシの実 (14.07.03)
秋になると赤く熟す。なかは
とろけていてマンゴーのよう
な味がするという

聴

生きものたちの声

ふとしたときにピオトープで耳を澄ませてみ
ます。アマガエル(右写真参照)の鳴き声や鳥
のさえずり、さまざまな生きものたちの声が聞
こえてきます。いつもは足早に通り過ぎてしま
うピオトープの小径。少しだけ耳を傾けてみて
ください。自然と一体になったような気持ちに
なるその場所は、忙しい毎日のなかでちょっと
した癒しの空間になるかもしれません。



触



ヤマボウシで遊ぶ

白い花びらのように見えますが、その部
分はじつはがくです。すべてのがくが同じ
くらいの大きさなので、竹とんぼのように
回して飛ばすとくるくると旋回しながら舞
い落ちます。見て楽しむだけでなく触って
遊ぶこともできる花がヤマボウシです。

詩を通して見えること

本誌でお世話になっている遠藤静江さん（81）。以前小学校の教員を勤めていらつしやった遠藤さんをわたしたちは「遠藤先生」と呼び、慕っている。先生は、自らも詩を書きながら都留詩友会の会長など、詩にまつわる活動を長年にわたって取り組まれている。先生の詩に心動かされ、詩に興味をもつようになったわたしは、詩についてお話をうかがうことにした。

舟田早帆（社会学科2年） 〓 文
廣瀬はづ紀（社会学科3年） 〓 写真

詩との出会い

わたしが詩に興味をもったのは、6月1日にミュージアム都留でおこなわれた「新生和服リフォーム展」でのことだ。和柄の小物が並ぶなか、一枚の詩画がわたしの目に留まった。

「水をいっぱい入れた紫蘇ジュースいい色になるんだなあもう一度こんな色にときめきたい」

詩にはグラスに注がれた紫蘇ジュースの絵が添えられている。グラスのコップに鮮やかな赤紫色の紫蘇ジュースが注がれ、なかに浮かぶ氷がキラキラと輝いている。読んでいると喉が渴いてくる。詩を読んで心動いたのは、わたしにとって初めてだ。



詩画が描かれた布の左下には「静江」というサインがあり、作者が遠藤先生であることがわかった。わたしが心動かされたあの詩はどうやってできたのだろう。わたしは詩を書いたことがないけれど、詩をたくさん書いてきた先生はどういう思いで詩を書き続けているのだろうか。

遠藤先生と詩

紫蘇ジュースの詩画は、先生が今から10年以上も前に書いた作品の一つだそう。着物の帯の芯に使われている布に、四季折々の詩画を何十枚も描いたそう。

詩を書き始めたのはいつごろですかと質問すると、先生は「あのね、これ私の宝物」と近くの棚の引き出しから茶色の包みをもってきてくださった。包みから出てきたのは年季が入ったセピア色のノートだ。二冊は国語のノートで、もう一冊は洋裁のノートだそう。わたしがふだん使う大学ノートよりもずっと面積は狭いけれど、その代わりにとても厚い。三冊全部合わせたら、小さめの辞書くらい厚みがありそうだ。「ノートがね、一冊がこれくらいつぎりの」と言われよく見ると、

3、4ページくらいいしかなないノートが何冊も綴じられて本のような厚さになっているのがわかる。国語のノートには先生が12歳のころから書いてきた詩が書かれているそう。

はじめは「詩を書く」というよりも、誰にも言えないような悩みや思いを書き留めていたという。それに毎日欠かさずというわけではなく、感情が動いたときだけ書いて、書きたくないときは書かない。そういうふうにして続けてきたそう。「そのままずっと続けていて。で、こういう自分の悩みから少しずつ違う方向ね。自分の身の回りのこととかね、思っていることとか、社会的なこととか。自分が立ち止まったことを詩に書いてたのね」。

みんなで書くこと

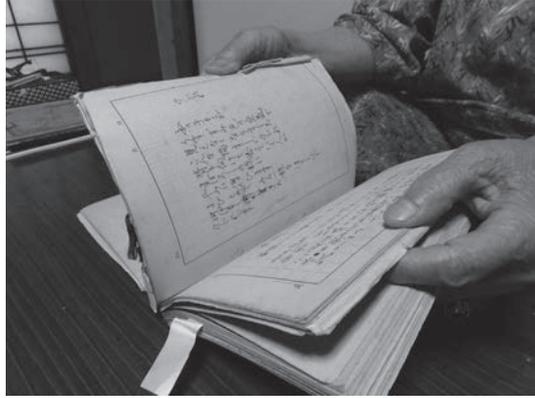
転機が訪れたのは昭和48年ごろ。それまではどこかに所属することはなく一人で詩を書いていたが、その年おこなわれた県の芸術祭で詩の部門に応募してみたそう。すると佳作入選が決まり、その後の芸術祭でも優秀賞や芸術祭賞と5回連続で入賞された。それまで詩を誰かに見せることはなかったが、受賞しほかの人から認められたことで自分のしてき

たことはこれでよかったのだ、と自信をもつことができたそう。

そして当時詩の会がなかった都留市に、先生は詩の会を立ち上げた。それが「都留詩友会」のはじまりだ。最初のうちは会員が集まりに出席しなかったり会費が集まらなかったりと、うまくいかないことも多かったそう。

詩誌の発行や詩の朗読会、有名な詩人の講演会、そして詩画展と都留詩友会ではこの40年のあいださまざまな活動がおこなわれてきた。詩誌は最初すべて手書きで、印刷も手刷りでやっていったそう。「でも大変なことより張り合いがあつて。自分の詩が一応こういうふう印刷されると、もう寝ても覚めてもそれを眺めてね、喜んでたのね」と、嬉しそうな表情でおっしゃった。まるで目の前にその詩誌があるみたいだ。

自分の詩、自分の言葉を自分の手で書き、刷り出して、目に見える形となったときの喜びはどんなに大きいだろう。わたしはそういった作業をすべて自分の力で成し遂げる大変さを知らない。けれど、自分の思いや言葉が印刷されたときの喜びならわかる気がした。印刷され形に残るということは、自分の



ノートは茶封筒のような袋に入っていた。ところどころテープ 小学校 6 年生のころ遠藤先生が使っていた国語のノート
で補修されている

発見や思いや考えたことが自己満足で終わらずに、多くの人と共有できるということだ。

一人で書くのではなく、会でいろいろな人たちと詩を書くことは、切磋琢磨することになるのだと先生はおっしゃった。「学生さんなんか見るとわかる。どんどん上手になっていく。上手って、核心に触れてくる。はじめはあることを書いてるだけだけど、その本質に迫れるようになってる」。ほかの人の詩から自分にはない感性や物の見かたを学んだり、仲間と競い合ったり。そうして詩を書いていくことで、ふだん見逃してしまうことや何気なく過ごしているだけでは気づけないようなことを見つけられるそう。

詩を書くことは本質を追究することなのだ、と先生はおっしゃる。「見るときは比較的上の面を見るわけ。上層をね。見えるところを。だけど、見えるところの向こうに潜んでいるものがあるんだっていうぐらい。書きながら出てくるんだ。だから詩を書くっていうことはそこが違うの。本質を追究してるの」。この言葉は的確じゃないな、と推敲を重ね、何度も書き直しているうちに本質が見えてくるそう。けれど、「見えるところの

向こう側」にたどり着くのは決して簡単なことではないそうで、「一つの詩を書くのにね、何枚書き直すかわからない」と難しそうに先生はおっしゃった。言葉一つ選ぶことにも何度も考え直し、それを積み重ねてやっと一つの詩が完成するのだ。

本質を追究する

先生が新しく書いた詩を音読してください。今度発行する詩友会の詩誌に載せるものだそう。

ふだんの何気ない会話で言ったことなのかで、本当に自分が思ったことをそのまま言ったことは何回あっただろう。当たり障りのない、適当な言葉ばかり使ってきたのではないか。そんなことを考えさせられる詩だった。

「やっぱり書くときって、言葉に対峙してね。真剣に本質的なものを探そうとするよね。だから見えるものの奥の見えないものを表現してくのね。それどういうふうにしたらいいかってのはね、難しいよね」。そうおっしゃった先生は少し困ったような表情をしていたけれど、すぐに「でも大変大変って言っただけで、すぐに」でも大変大変って言っただけで、(気が)下がってたらなにもできないから」と

それぞれの国が
それぞれの共通語を持っている

日本人の共通語は日本語
どの様にして手に入れたのか
詮索することもなく

何の矛盾も感ずることもなく
くらしのなかで安易に使っている

マンマ マンマ
パパ ママ

ダッコ
ことばは劫初人間の命だった
ことばは生命の絆だった

今
ことばは仲間を増殖し
居場所を特定せず

あらゆる場所で氾濫をおこし
ことばの数だけ人間は病んでいる

ことばは信じてもらえない

人間は
信じてることを装っているだけだ

そして今

ことばは危機に直面している
「平和」ということばが危ない

「積極的平和主義」とやらは
武器を持って外国へ出向くことなのか

今だに十五万人もの避難生活者
「原発の安全」——とは

そんなことばに疑問を抱く
曖昧なことばに翻弄され続けている

もうことばを信じない

ことばを見放そう
ことばが真に内蔵しているもの——

人間がそれを見抜けない限り

ことばは永久に孤独なままだ

明るい声でおっしゃった。

——本質を追究する。核心に迫る。最初にその言葉を聞いたとき、わたしは先生がおっしゃったことの意味をあまり理解できなかった。けれど、先生が詩を読んでくださったのを聞いて、ぼんやりとだけれどその意味が見えたような気がする。

先生が書く詩の題材は、ふだんの生活のなかで見られる風景や身近にあるものばかりだ。言葉はわたしたちの身近にあるものだし、使えることがもう当たり前になっている。わたしなら何でもないことと思つて見逃してしまふことでも、先生は詩で拾い上げて表現だ。「見えるものの奥の見えないものを表現してくのね」という先生の言葉をもう一度思い出した。先生はそれが本質を追究することだと言っていた。「見えないもの」というのは、見逃していたり、見ないようにしてきたものなのかもしれない。

先生の詩は今まで当たり前だと思つて見逃してきたことを気づかせてくれたり、気にも留めなかったものの新しい見かたを教えてくれたりする。だからわたしの心に留まるのだ。



山菜を味わう

5月16日、梨ヶ原で採れたワラビをいただきました。ワラビはアクが強いので、重層を溶かした水に一晩浸けてから茹でて食べました。私はこれまで、山菜というものは全て苦そうな印象があり敬遠していました。けれど、今回初めてワラビを食べてみてびっくり。想像していたような苦みはなく、茹でたあとなのにシャキッとした歯ごたえがありとてもおいしかったです。今まで食べてこなかったことをもったいなく思いつつ、新しい好物に出会えたことを嬉しく感じました。

(金原由佳)



先端の丸まっている部分も食べることができます

和服リフォーム展

6月1日、和服リフォーム展実行委員会主催の「新生 和服リフォーム展」がミュージアム都留で開催されました。会員のかたによってシャツやワンピースに生まれ変わった古い和服の姿に、女子編集部員はときめいていました。また、本誌でたびたびお世話になっている遠藤静江えんどうしずえさんのご指導のもと、和服の端布を利用した小物入れをつくるなど、和服リフォームの体験もさせていただきました。6月1日から8日までの8日間で700人近くが来場したそうです。

(舟田早帆)



全部で113点の作品が展示されました

お田植え

6月8日、宝地区にある羽野幸はのさちさんの田んぼでお田植えをさせていただきました。この日はあいにくの雨で、田んぼの水かさも増すなかでの作業となりました。水かさを増した田んぼは泥がやわらかくなりすぎて、苗を植えるのは難しかったです。一本一本でいねいに植えるこの作業。昔の人々はすべて手作業でおこなっていたと思うと、驚きや尊敬の気持ちでいっぱいになります。こうして汗水を流し、やっと食べものを手に入れることができる農業は、命に直結したお仕事なのだと思えてきました。

(伊藤留依)



一列になって後ろに下がりながら植えました



次回予告

変化(仮)

2014年12月 発行予定



FIELD NOTE

no. 82 Aug.

発行人

北垣憲仁 (10-11,36-37)

統括編集者

西教生 (12-13)

編集長

別符沙都樹 (4-9)

副編集長

伊藤瑠依 (14-17,20,38-39)

舟田早帆 (40-43,46-47)

編集

廣瀬はづ紀 (1,24-25,48)

加藤萌香 (30-31,36-37)

金原由佳 (28-29)

今村遥香 (21,26-27)

小俣溪和 (22-23,32)

高橋未瑠来 (2-3,33)

長尾泉 (26-27,34-35)

南條新 (18-19,44-45)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 82号

発行日: 2014年8月28日

発行部数: 500部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

夏にしたい遊び



か あーっと照りつける日差しのなか、川遊びをしたいです。このあいだ、中屋敷へ行ったときに川と滝を見ました。とても暑い日だったので川のなかへ入って遊びたくなりました。小学生のころ、夏休みには毎日のように家の前の川で日が暮れるまで遊んでいました。今では、水かさが減少し魚をあまり見ないのですが、かつてはアユが泳いでいることもありました。都留の水はきれいだと思います。今年の夏休みは、童心にかえって都留の川で遊んでみたいです。(今村遥香)

い つも夏になると近所の友人たちと集まって、そばにある草むらで虫採りをした。珍しい虫が採れるとお互いに自慢しあった。けれど歳を重ねるにつれ、家にひきこもるようになる。私のまわりでは女の子も男の子も虫をみて歓声をあげることはなくなっていた。私も同じだった。けれど都留にきて山に登ったり森にでかけたりするうちにあのときの感動が蘇るような心地がした。生きものの生きいきとしたようすを見て感動する。この感覚を思い出せたことが嬉しい。今年の夏は自分用の虫採り網を買いたいと思う。(高橋未瑠来)

と しの夏は川で遊びたい。とくにしたいのは水切りだ。河原で投げやすく遠くまで飛びそうな石を探して、水面と10度くらいの角度に思い切り投げる。石が水面をはねて進んでいく。推進力を失うにつれてはねる間隔が短くなり、最後にはポチャと音を立てて水のなかへ。たくさんはねればうれしいし、この一連の過程で聞こえる音は私に達成感を与えてくれる。まるで一種のスポーツのような水切りを一日中ただひたすらやっていたい。たくさん投げてコツをつかんで上手になり、石をたくさんはねさせたい。(南條新)

カイコの成長

地域交流研究センターにて



編集室にカイコが来ました。
これから毎日みんなで世話をしていきます。食欲旺盛で、葉はみるみるうちに葉脈だけになっていきます。
(2014.06.12)

たくさん葉を食べたあとは、せっせと糸を吐き、繭にこもっていきました。この繭から純白の絹をとることができます。 (2014.07.09)



カイコガは羽が退化しているため、飛ぶことができません。繭をつくる用に置いたトイレトペーパーの芯にずっとつかまっています。手足が丈夫なのでしょうか。
(2014.07.09)